

## 戦前日本におけるスポーツ医学の台頭： 1930年代前半におけるその理念と実践を中心にして

佐々木陸摩

早稲田大学スポーツ科学研究センター

キーワード: 体育, スポーツ, スポーツ医学, スポーツマンの身体

### 【抄録】

本稿は、戦前日本においてスポーツ医学と呼ばれた知的営為の展開を、その台頭期というべき1930年代前半に焦点をあてて歴史的に明らかにするものである。

これまでの通説では、戦前日本においてスポーツを対象にした学問は、あくまで体育学の一部としておこなわれるにとどまっていたとの理解が示されてきた。とはいえ、同時期に教科体育とは異なる文脈で発展していったスポーツと医学の結びつきは、1930年代前半の新聞や雑誌に見ることができる。1933年までには、「スポーツ医学というモダンな学問が体系づけられてきた」と評されるようになっていたのである。

しかし、これまでに1930年代前半のスポーツ医学がいかなるものとして展開していたのかについて、一次史料に基づく実証的な検討はなされてこなかった。そこで本稿は、1930年代前半にスポーツ医学と呼ばれた知的営為の担い手である医学者たちがいかにスポーツに関与し、どのようなスポーツ医学の知と実践を新たに生み出していったのかを明らかにすることを目的とした。

その検討の結果は以下のとおりである。

1920年代後半、日本で初めての民間のスポーツ医学組織であるスポーツ医事研究会が発足し、同会の医学者らは研究の実験場を研究室から競技場へと移した。そして彼らは、1930年の第9回極東選手権大会での大規模な医事調査研究を通じて、スポーツマンのみに見られる身体的特質を明らかにすると同時に、スポーツ医学の独自の意義を主張した。そのスポーツ医学には大きく二つの方向性があった。一つはスポーツのためのスポーツ医学であり、もう一つは医学のためのスポーツ医学であった。両者の重複領域には、スポーツに資する臨床的医学知とその実践が位置づけられたのである。

1930年前後の時期は、過労による疾病をひき起こす可能性があるスポーツの身体的弊害が問題視されていた。とくに1931年8月の人見絹枝の死はスポーツの弊害を人びとに強く印象付けた。人見の死後、スポーツ医学者は、スポーツの弊害を恐れずに練習や競技を行う選手が過労に陥る弊害を予防し、かつ競技能力の向上にも資する積極的な予防医学としてのスポーツ医学の必要性を主張した。そのようなスポーツ医学の応用は、1932年のロサンゼルス五輪で実践された。その後、スポーツ医事相談と呼ばれたスポーツ医学の臨床的実践が大学や地方の体育協会へと拡大していった。1933年10月の文部省による運動医事相談所の設置はそうした文脈に位置づけることができる。つまり、1930年代前半の時点でスポーツ医学は、体育研究所の外部で競技としてのスポーツと密接な関係を構築し、教育としての体育学研究とは異なる枠組みのなかで、競技力の向上を希求するスポーツマンの身体に特有な医学的知見を蓄積していったのである。

スポーツ科学研究, 20, 73-94, 2023年, 受付日: 2023年2月28日, 受理日: 2023年7月21日

連絡先: 佐々木陸摩 359-1192 所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学スポーツ科学研究科

rikumasasaki@gmail.com